

巻頭エッセイ

物づくりを伝える



吉永清人
五洋建設株式会社
常務執行役員

私たち以上の世代の日本人の多くは、物づくりが好きだと思いませんか。

親父がバイクの整備工であったこともあり、子供の頃からラジオなどいろいろな物を作ってきましたし、大学も土木を専攻したのもその延長ではないかと思えます。大人になってからも料理や家庭菜園など違う物づくりを楽しんできました。

物づくりに上達するためには、いくつかの要素が必要になります。手先の器用さ、忍耐強さ、そしていい物を作りたいという意欲、創造力といったものが大事だと思えます。

手先の器用さは、大事な要素ではありますが、「器用貧乏」という言葉があるとおりに、むしろ愚直に物づくりに取り組む心構えのほうが大事だといえるかもしれませんし、物づくりへの熱意や忍耐強さは欠かせません。

また、物づくりには、物に対する愛情や更に上を目指す創造力がなければ、本当にいいものは作れませんし、物づくりの進歩もなくなります。

更に、物づくりを支える道具を作り、改良し道具が体の一部であるかのように使いこなすということが大事になります。そういう意味では、物づくりは、人と道具が一体となった創造の世界といえるかもしれません。

土木構造物も、物づくりのひとつの形です。基本的に一つ一つが異なるオーダーメイドの物づくりです。特に海洋構造物については、道具までオーダーメイドの職人さんの世界に近いと思えます。物づくりの技量が、個々の職人さんのノウハウに依存しており、道具も職人さんの手作と似ています。

海洋土木の代表的な道具が作業船であり、そして、職人さんが、技術者、船員や作業員の皆さんです。

しかし、今やその多くの方が高齢化し、作業船も老朽化してきています。

海洋土木での物づくりをいかに伝えるかは、重要な課題です。職人さん（人）と道具（作業船）どちらも伝えていかなければなりません。

人づくりの課題は、若い人の数が少なくなり、物づくりへの関心が薄くなってきていることでしょう。人づくりのためにも海洋土木プロジェクトの活性化が期待されますが、国内だけでは限界があるとすれば、海外プロジェクトへの参加を促進する官民協力したシステムの強化が必要でしょう。

更に、これまで官産学で分業化してきた海洋土木プロジェクトの計画、設計、施工の取り組みを、これまで以上に総合化し、産官学が協力していくことが有効と思えます。

作業船をいかに伝えていくかの課題は、海洋土木プロジェクトが限られていくなかで、作業船の建造が民間の経済ベースに乗りにくくなってきていることでしょう。

海洋土木プロジェクトの活発化し、その見通しが明らかになることが有効ではありますが、現状では困難な面もあります。このため、官サイドからの支援や官民の情報交換が必要となってきています。

支援の方策は、税制や補助なども有効ですが、国内外の大規模プロジェクトをメインターゲットとした官民の共有船的なシステムを検討に値するかもしれません。このようなシステムは、海外市場で日本チームが受注していくためにも有効かもしれません。

海洋土木の物づくりを続けていくために、人と作業船をどう伝えていくかを皆で考えていければと思っています。